

現代社会の家族の風景より

早樫一男¹

Kazuo HAYAKASHI

はじめに

今回は、ある相談の最初から完結までの話しをしながら、現代の家族が直面する一般的な課題を紹介する。また、相談の中で働きかけたことやどのような点を大切に考えているのかについても、伝えたいと思っている。ケースについては、プライバシー保護の点から再構成してある。

家族に出会うと 家族のパターンがわかる

相談といえば個人を対象にした相談が中心である。私は子どもたちの相談現場で長くいたが、ある時期から家族を対象にした相談面接のトレーニングを受けた。最初は、問題がない健康な家族との面接を経験することから、家族との面接の仕方について学んだ。相談では、できるだけ御家族一緒に来ていただくという面接スタイルをとる。結果的に、お母さんだけの面接であっても、できるだけ家族を視野に入れながら相談に対応している。私たち個人には癖があるように家族にも癖がある。それは、家族のパターンであり、問題が起こった時の解決の仕方とも共通している。

はじめりは、突然の相談から…

「中学校2年の一人娘のことで…」と言って、お母さんが突然ご相談に来られた。小学校の時は特に問題がなく、中学校も最初は順調に登校していたとのこと。また、一人娘なので、随分と可愛がり、早くから塾に通わせたり、ピアノや体操教室などにも通わせていたとか。2年生の1学期、登校を渋るようなことが何度かあったので気にしていたところ、2学期になってから完全に学校に行かなくなった。「どうするの?」と言うと、娘は「ほっといて!」と口答えをする。「あれこれ言ってもダメで…」と、一方的に話された。あるとき、思わず、ベルトで首を絞めたことがあると…。お母さんも不安や戸惑いなど、いろいろな思いが募っていた。

面接の途中、お母さんが、「ちょっとよろしいか」と言って、話題が変わった。「実は仲人にだまされたんです」と…。夫婦の間では離婚のことが話題になつても。「子どもも大きくなったので、私としてはこのまま主人と一緒にいるのかと思うとちょっと憂うつになって、何か気分が落ち込んだり、うつみたいになることもあって…」と話が続いた。1年ほど前から、夫婦の間では離婚が話題になっていたとのこと。

離婚の統計より

1950年から2000年までの10年ごと区切った婚姻期間別の離婚の推移についての表がある。

¹ 同志社大学心理学部 (Faculty of Psychology, Doshisha University)

2000年を見ると, 結婚5年未満のカップルの離婚はおおよそ10万件ぐらい。結婚後5年から10年は7~8万件ぐらい。同じく, 10年から15年の方は4万件ぐらい, 15年から20年の離婚も3万件弱。結婚して20年以上は5万件程度ある。

さらに, 1950年の状況と比較してみると, 結婚20年以上のカップルの離婚が飛躍的に増えている。現代の家族の離婚の特徴は, 全体的な離婚の増加の中で, 結婚20年以上経過するカップル, いわゆる熟年離婚が統計的にもかなり増えているということがはっきりしている。

このお母さんというか夫婦もその範疇に入る。離婚予備軍と言ってもよいかもしいが, 子どもが大きくなってからの離婚, あるいは20年ぐらい寄り添っていたカップルが離婚するというのはどういう心境なのか, どういうことが夫婦の中で起こっているのかということに, 改めて, 関心を持った。そこで, 次のようなデータが目にとまった。

日本人の平均寿命

1955年, 日本人の平均寿命は60歳前後。女性は60歳を少し超えている。1992年には80歳前後になっている。女性は80歳を超えている。

1955年の頃, 子どもたちの数は多かった。結婚年齢も今よりも早かった。例えば, 女性は20歳過ぎぐらいで結婚。仮に, 末子を35歳ぐらいで生んだら, そのお父さんが一人前になるのは, 女性は55~60歳。子育てが終わったら, 人生そのものが, 「はい, ご苦労さん」という時代。

最近では晩婚と言われている。子どもが健康に育ち, 自立をすれば, その頃の親の年齢は昔と余り変わらないかもしれない。大体60歳過ぎぐらい。

問題はその後である。子どもが健康に自立するという事は, 改めて, 夫婦2人だけになるということである。平均寿命が長くなるということ, 夫婦の年齢が60~65歳ぐらいから, 改めて, 20年以上夫婦と一緒に暮らすということである。そこで, 関係性の問題が起こるわけ

す。「これから, いつまでこの人と一緒にやっていくの?」ということ, 女性のほうが考えても不思議ではない。

このお母さんも, 「この人とずっと一緒にやっていくのか?」「これからの人生どうなんやろう?」ということが浮かんできた。子どもの相談で来られたのだが, 夫婦の課題もリンクしている。そういう特徴が現代の夫婦や家族の中には潜んでいる。

子育てが終わりにかける時期は, 改めて, 夫婦が2人でやっていく時期を迎えるということ。いつまでも夫婦でいるのかどうかということが問われてる時代, 夫婦のあり方が問われている時代でもある。

うつ病の統計から

お母さんが, 「うつになりそうです」と。そこで, 「うつ病・躁うつ病の患者数」の推移(男女別)や「男女年齢別総患者数(2005年10月)」というデータを見た。

男女別では, 2対1ぐらいの割合で女性が多い。男女年齢別で見ると, 男性は40歳代をピークに山がある。職場のストレスなどが指摘される中で, 自殺予防対策も含めて, 職場や企業は, 働き盛りの男性のケアやリハビリなどにも力を注ごうとしている。

一方, 女性は山というよりも, 加齢とともに増加していく。男性の仕事や職場のストレスに匹敵するものとして家事や育児が, 男性の人間関係に匹敵するものとして, 親子, 夫婦, 嫁姑関係などの家族関係がある。もちろん, 女性ホルモンなどの身体的な要因もあるだろう。

症状と家族

この相談は不登校であるが, その原因は定かではない。仮に, 夫婦がもめているとしても, それを不登校の原因だと決めつけることは危険である。

もちろん, 子どもが学校へ行きにくいとか悩

みがあるときに、夫婦や家族がもめていると、「学校行くのはしんどいけれども、頑張っで行こう！」という気にはならない。やはり、家族が安定していることほど子どもにとっては安心なことではない。そういう意味では、子どもの問題を解決するときに、家族お互いが少しでも歩調を合わせて、問題解決に協力できるようにというのが考え方の基本となっている。

2 回目の面接

ご家族にお会いするときに家族関係を表すものとして「ジェノグラム」を作っている。男性は四角、女性は丸、夫婦は横線でつなぐ、子どもはその横線から縦線をおろして、四角（男の子）や丸（女の子）を書く。

お父さんは長男で弟が一人、お母さんは姉が二人いる。姉たちが恋愛結婚を理由に遠方へ嫁いだため、お母さんは家の跡を継ぐことになってしまった。お父さんは、親がかなり厳しかったので、親との同居を嫌い、家を出ていこうと思っていた。だから、見合いの話をチャンスだと思った。当然、お父さんの親は結婚（婿養子）に対して、随分反対したが結婚にいたった。結局、弟夫婦が親と同居している。

ジェノグラムを見ながらお母さんは結婚にまつわるエピソードを語った。「夫は結婚以来実家に戻ったことがない」とも。結婚のいきさつがあるから、実家とは縁切りとなってしまう、娘を連れて行くとかお盆や正月に行くとかということもなかったと…。

お母さんはつぶやくように、「離婚の話をしているが、夫は離婚したらどこ行くんやろう…」と。さらに、「結婚して家庭を持ったものの、結局は自分の居場所がどこにもないようなさみしい人なんか…」とぼつぼつと語り始めた。「この人の顔は見たくない、もうこの人とは嫌だ」という思いが変わった瞬間だった。

「さすがお母さん、大切なところに気がついた！」とお母さんを褒めた。

その後の家族

「家族で花札しています」と正月が終わってからの面接では報告があった。「お正月ぐらい家族で何かしよう」という話になり、おばあちゃんも一緒なので、家族4人ができるものということで、「花札」になった。夫は缶ビール飲みながら、機嫌よく加わっている。2週間ぐらい続いた頃、夫が「きょうもやろう…」って声をかけるようになった。娘は抜けたが、大人3人は楽しみとなり、每晚続いた。

「離婚する」「離婚したら父親と出ていけ！」と言っていた母が、何となく楽しそうにやっている。隣の部屋にいても、やわらかい和やかな雰囲気伝わってくる。娘にとっては、大人が安定している姿を見る機会となった。

さらに、その後、お母さんはボランティアに出るようになった。お父さんの仕事は倒産したが、ハローワークに通って、自分で仕事を見つけてきた。家族が動いてる姿を見ながら、娘は新しい学年から徐々に登校を再開することになった。

家族が変わったから登校したかどうかはわからない。証明のしようがない。ただ、家族が変わったことは事実である。家族の変化と子どもの変化は連動することがあると思うと、「家族はおもしろい」「家族って本当に大事」ということを痛感している。

人間関係は相互関係

問題解決に際して、直線的思考ではなく、円環的（循環的）思考を大切に考えている。直線的思考というのは原因があって結果があるという考え方。人間関係というのは一方的な関係ではない。相互関係、お互いに影響し合っている関係。「このようになったのはあなただ！」という直線的思考は相手を責める、犯人捜しをする、相手の変化を求める（自分は変わらない）ということにつながる考え方。「私は悪くない」という思いも含まれている。

人間関係は相互関係であり、円環的(循環的)思考になれば、解決は少なくとも二つ以上ある。さらに言えば、実は、相手を変えることは難しい。自分自身の見方を変えることからこれまでと違った循環を作り出せる。このお母さんは、「離婚したい夫」と思っていたが、「今までよく頑張ってきてくれた夫」というように変わった。お母さんの夫に対する見方が変わった。

円環的(循環的)思考では、変化の可能性はいくつかある。よい循環をいかにつくり出すかという問題解決思考を大切にしている。

家族を理解する「三つのキーワード」

一つ目は「バウンダリー(境界)」。特に世代間の境界ということに注目する。世代間の境界線があいまいであると問題が起りやすい。あるいは、解決が長引く。

二つ目は「サブシステム」。サブシステムというのは家族の中での、さらに小さな単位。夫婦(親)サブシステム、子ども(同胞)サブシステム、祖父母サブシステムがある。横同士がまとまらないといびつなつながりになる。例えば夫と夫の母親のつながりが強すぎる。「ファ

ザコンと言われたりする」、夫婦という単位でも波風が立つ。また、横同士がまとまっているということは、世代間の境界線が適切に引けていると考える。

三つ目は「パワー」。パワーには支配、管理、権力など、いろんな側面がある。その中でも「決定」に注目する。家族は「決める」ということを繰り返している。そして、家族によって「決め方」の特徴がある。また、大きな決め事あれば小さな決め事もある。家族の中で、問題が起こったときの取り組み方、対応の仕方とも共通している。問題の解決が長引いているときには、これまでの対応の仕方を変えてみることを提案することもある。

問題のない家族はない

問題が問題ではない。問題のない家族、あるいは問題が起こらない家族はない。問題はどこでも起り得る。

何か問題が起こった時、あるいは困ったなどということが起こった時に、どのように解決するか、解決に向かうかということの方が問題である。